



タイトル Title	歴史より道徳に属する歴史認識問題
著者 Author(s)	木村, 幹
掲載誌・巻号・ページ Citation	世界週報,86(28):34~37
刊行日 Issue date	2005-07-26
資源タイプ Resource Type	Article / 一般雑誌記事
版区分 Resource Version	author
権利 Rights	
DOI	
JaLCDOI	
URL	http://www.lib.kobe-u.ac.jp/handle_kernel/90000395

Create Date: 2018-06-25

ある日本人教授は、過去を巡る問題に対して私にこう問いかけた。

「日本が過去、韓国に対して犯した過ちに対しては本当に申し訳なく思います。しかし、そもそも我々は一体何時まで謝罪し続けなければならないのでしょうか。そしてどうしていつも謝罪する度に、『その謝罪は本当に心からのものなのか』、と言われなければならないのでしょうか」。

この質問に対して、私の中には一つの答えがふつふつと浮かんできた。しかし口にはしなかった。私はこう言いたかったのだ。

「日本の島が太平洋に沈まぬ限り、韓国人は日本人に対し、過去に対する謝罪を要求し続けるだろう。韓国人が日本人より豊かになり、日本が韓国を「兄」として慕うようにならないければ、韓国人は過去のことを忘れることができないのだ。」

これは、昨年末、韓国の保守系月刊誌に 1962 年生まれの比較的若い韓国人心理学者が、寄せた一文である。韓国における過去に関わる認識において、最も重要なことの一つは、植民地統治を実際に経験した古い世代のみならず、この心理学者のような世代の人々さえ、過去に対する強い拘りを有している、ということだ。即ち、それは植民地時代の経験が過去のものとなり、時代の変化と共に忘れられていく、というほど簡単ではない。どうして、問題はここまでこじれてしまったのだろうか。

このような過去の問題とその原因の関係は、病気とその原因、そして治療法の間関係に類似している。病に苦しむ患者に対して、どうしてお前はこんな病気になったのだ、と非難したとしても、患者が救われる筈もない。重要なのは、病気だという事実ではなく、何故に病気になったのか、そしてその延長線上にある治療法が何か、ということだ。徒に大きな声で相手を批判しても、時にそれは解決へつながるどころか、相手側の反発を生み出すことさえ珍しくない。どちらの側からであれ、自らのみが真実を知っているかのような、相手さえ見下した論調は、実直な歴史研究を行う研究者さえ離反させる。相手の何かしらを変えようと思うなら、相手を理解し、彼らをして耳を傾けるように仕向けることが重要なのだ。

重要なことが一つある。過去は過去である以上、それが後になって変わることはない。にも拘らず、その意味が変わったのなら、変わったのは過去ではなく現在に生きる私達なのである。だからこそ、過去を語る上では、時に、過去そのもの以上に、現在に生きる私達自身が、どのように行き、また生きて来たかが重要だ。

それでは、日本と韓国の過去に纏わる歴史認識はどのようにして形成されてきたのだろうか。参考になるのは、植民地支配とその過去が他国ではどのように扱われているか、であるかもしれない。例えば、イギリスでは、第二次世界大戦後の首相達が、嘗ての植民地支配を賞賛する発言を繰り返し行ったことが知られている。80年代のフランス大統領であったミッテランがアルジェリアの独立運動弾圧の当事者であったことも有名だ。ドイツでさえも、第二次世界大戦にまつわる過去に対してとは対照的に、嘗て植民地として支配したナミビアやタンザニアに対する謝罪の意を明確にしている訳ではない。総じていえば、欧米諸国は、植民地支配に対しては冷淡な態度に終始している。

もちろんその事は、欧米諸国のそのような歴史認識が、嘗てその植民地であった国々にも共有されていることを意味はしない。インドにせよ、アルジェリアにせよ、植民地支配

を経験した国々の歴史書は、欧米諸国の支配に対する怨嗟の声に満ち溢れている。嘗ての宗主国と、嘗ての植民地との間には、共通の歴史認識、など存在しないのだ。

にも拘わらず、両者の間に、今日まで続く、政府と国民を巻き込んだ大規模な歴史認識論争が存在するか、といえばそうではない。歴史認識の差異が存在する、ということと、歴史認識を巡る紛争が存在する、ということは、異なる次元に属することなのだ。

それは一見、不思議な現象に見える。しかし、ここで考えてみよう。自分に対して屈辱を与えた相手が、嘗てと同じことを繰り返し言っている。にも拘らず、それが大して気にならないとするならば、その可能性は唯一つ、既に過去とそれを巡る論争が、私達自身にとって、大きな意味を持たないものになっているからである。この点について明らかなのは、冒頭の文章からもわかるように、韓国の人々にとっては、依然として過去は、重要な問題であり続けている、ということだ。

もちろん、だからといって韓国も何時までも過去に対してこだわり続けることを止め、「未来志向的」な方向に転換しなければならない、などということも意味がない。インドやアルジェリアとは異なり、韓国が過去にこだわり続けているのにも、理由がある。それを省みず、相手の「反日意識」や「反日教育」を論うのも責任あるやり方だ、とは言えない。

明らかなのは、韓国がその独立に至る過程が他の旧植民地諸国と決定的に異なるということだ。インドがガンディー等の粘り強い民族運動により独立を獲得したことは有名だ。アルジェリアのフランスに対する武力抵抗が激烈であったこともよく知られている。両者は共に、手段を尽くし、自らの手で独立を獲得した。

しかし、韓国はそうではない。もちろん韓国の人々による抵抗運動は存在した。しかし、それは直接的には結果とへは繋がらず、韓国の解放は、日本が第二次世界大戦で敗れることにより、「外から」与えられることとなった。重要なことは、本来独立は、韓国人自身の手によって勝ち取られるべきものであり、また、それを勝ち取る過程でこそ、彼等の日本人に対する複雑な感情は払拭された筈だ、ということだ。インド人にとって、イギリスが残した巨大な建築物は、彼等が民族運動により勝ち取った戦利品である。だからこそ、それは輝かしく、彼等の民族的プライドを脅かすことはない。しかし、ソウルに残された建築物は、ただ日本が残したものに過ぎず、それらは韓国人にとって、屈辱以外のなにものをも意味しない。だからこそ、彼等はこぞってそれを打ち壊し、風景を「再現」することに全力を尽くす。

問題は日本人についても同様だ。本来、植民地支配に対する認識は、独立運動により追い詰められた我々が、支配の最終局面に直面し、得られる筈のものであった。しかしながら、追い詰められることなく植民地を去った日本人の一部は、依然として嘗ての植民地の人々に対する優越意識を持ち続けている。彼等は、韓国の人々が心の奥底でその支配をどのように考えていたかについてさえ、思いを巡らせようとするのではない。

独立の獲得とは、即ち、植民地の側の勝利を意味しており、その中でこそ、嘗ての支配者はこれまでの過ちを素直に詫び、勝利した植民地の側は、勝者であるが故の寛容を以てこれを受け止めることができる。しかしながら、日本が第二次世界大戦に敗れ、朝鮮半島が列強の力により解放された時、日本と朝鮮半島の人々は、この貴重な機会を永遠に失った。現実的に考えるなら、過去に関わる問題を、過去が誰にとっても過去になった時点で、

真摯に話し合うことは容易なことではない。時計の針を戻して、独立運動をやり直すことが不可能な以上、韓国の日本に対する複雑な感情は永遠に残るだろう。今日の日本人が過去の問題を自らの問題として詫び、真摯に反省することも簡単ではない。今日の日本人にとって、過去の問題とは、自らとは異なる「過去の世代」の為したことであり、それを「現在の世代」が償うことは、個人主義的な観点からは、矛盾した営みであると考えられるに違いない。

重要なことは、日韓の過去にまつわる問題は、理由があってこじれている、ということだ。そのような問題を、安易な精神論や通り一片の謝罪により解決できると思うのなら、それは控えめに言っても楽観的に過ぎよう。この問題は明らかに、歴史というよりは道徳の領域に属している。歴史観を変えることを要求する、ということは、相手に相手の道徳観を変えるように要求する、ということであり、それが容易な筈はない。

そう考えるなら、例えば、筆者自身も研究協力者として参加した日韓歴史共同研究に典型的に見られたような、両国の歴史研究者が真摯に語り合えば、「正しい歴史観」が得られる、と考え方も、現実の正しい認識の上にあるものではない。もちろん、研究者の相互交流自身は、相互理解を深める為には重要だ。しかしながら、より重要なことは、事実の探求それのみにより、両国の歴史認識の差異を直接的に埋めることは不可能だ、ということだ。

何故なら、両国の相違は、歴史的事実そのものに対する知識の違いにあるのではなく、歴史に対する考え方、更にはその背後に存在する両国民の世界観の違いにあるからである。例えば、筆者が担当した「総力戦期」つまりは、第二次世界大戦期の朝鮮半島にかかわる部分なら論争では次のように展開された。筆者にとって歴史を理解する、ということは、ある時代を自分なりに再現し、そこに生きた人々の営みを考察する、ということに他ならない。後世の倫理的な基準により、どのように評価されるべきかは、歴史には属さない。それよりも遥かに重要なのは、彼等が如何に生き、何故にそう生きたのかを、ありのままに考えることだ。「政治的、或いは過度に道徳的な色彩を帯びた議論を排して、飽くまで学問的な観点から研究が行われることの必要性が今こそ、問われているのではないだろうか」。

日韓歴史共同研究にて自分が執筆した報告書の末尾にはそう書いた。

残念ながら、このような問題意識は、韓国の歴史学者と共有されるには至らなかった。何故なら、彼等にとって重要なのは、過去の再現ではなく、日本の植民地支配の問題点を明らかにし、その責任を追求することにあるからである。根底にあるのは、事実の認識の違い、ではなく、そもそも何の為に歴史を語るか、の違いである。普遍的な歴史に関心を向ける日本の研究者と異なり、韓国の研究者は、日韓関係、或いは、韓国を巡る歴史の特殊性に向けたがる。そこには、朝鮮半島を巡る歴史は特別な意味を持つものであり、その中で朝鮮半島に住む人々も特別な意味を有している、とする彼等の民族的な認識が存在する。そこには、彼等の奉じるナショナリズムが、直接的な形で反映されている。

日韓は、このような歴史に対する異なる認識を根底に、今日までかみ合わない議論が続いている。私達は、まずはその前提の違いをきちんと認識し、これに対処する方法を考えなければならない。そして、そこで議論されるべきことが一つある。そもそも私達の目標は、この東アジアに住む全ての人々が同じ世界観や歴史観を共有する、そんな画一的な社会を打ち立てることにあるのか。それとも歴史のみならず、世界や社会に対する多様な考

え方が存在する社会を作り出してゆくのか。民族と民族の対立は論外であるが、多様な議論の存在を認めない状況も危険ではないのか。まずはこのメッセージを伝えること。それこそが重要なのではないか、と思う。

略歴

木村幹（きむらかん）。1966年大阪府生まれ。京都大学法学部卒業、同大学院法学研究科修士課程修了。博士（法学）。愛媛大学法文学部助手、講師、神戸大学大学院国際協力研究科助教授、ハーヴァード大学客員研究員、高麗大学客員研究員、等を経て、現在、神戸大学大学院国際協力研究科教授。著書に、『朝鮮半島をどう見るか』（集英社新書）、『韓国における「権威主義的」体制の成立』、『朝鮮／韓国ナショナリズムと「小国」意識』（共にミネルヴァ書房）等がある。